

## 第5回「こども条例(仮)」を考える市民ワークショップ

【日時】 令和6年4月24日(水) 午後19時00分～20時40分

【場所】 市役所地下1階 市民ホール

【出席】 23名  
市民16名(うち5名Zoom)、事務局7名

### 【概要】

令和6年度「こども基本法」に基づく市の「こども計画」の策定が必要となるなか、その前提として市議会から政策提言を受けた「こども条例(仮)」の整備について検討すべきと考え、市民の参画や関与を得て、より実効性ある取組みとするための第5回ワークショップ(毎月1回程度開催を予定)を開催した。

### 【詳細】

1. 開会あいさつ(こども未来部長)  
こども未来部(こども政策課、こども家庭センター)を創設  
「第九次総合計画」「こども計画」の策定年度、議会政策提言を受けた「こども条例」についても、「宣言」などの方法も含めて検討中  
市民の参画を得て取りまとめたい、忌憚ない意見を賜りたい
2. 自己紹介(各自から氏名、所属団体など)
3. 資料説明(こども政策課長、母子保健係長)～意見交換  
テーマ「出産前から乳幼児期までのこどもの育ち(まちぐるみでこどもを育む)」  
スクール形式で全体の説明を受けた後、4グループ(うちZoom1)に分かれ、意見交換を行った。

最後、グループ毎にどのような話が出たか、全体で共有して終了した。  
次回第6回は、5月27日(月)同時刻、地下市民ホールで開催予定

意見のまとめは別紙のとおり

以上

## 1. 説明資料について

## &lt;感想&gt;

- ・ビジョン 19 頁（こどもまんなかチャート）の「地域の空間に居る人」の役割や価値観が社会の雰囲気を作っていると思うため、全ての人が当事者との考え方に共感した。どうやって、地域に浸透させていくかが大きな課題と思う
- ・異次元の少子化対策とあるが、何が異次元か分からない
- ・良いことが書いてあるが、そのとおりに思えるような自分達の実感としては感じられない
- ・こどもだけでなく、人間がウェルビーイングであることが重要
- ・岐阜市出身だが、高山でバスに乗り合わせる高校生が挨拶をしてくれるのに感心した。キャリア教育で中学校に行った際にも、皆良い子だった
- ・充実した縮小を考える必要がある
- ・マイノリティ（こども、子育て世代）からの底上げが必要となる
- ・恋愛など様々な経験が少ない保護者が増えているのではないか
- ・二人三人とこどもを設けている人は大変だと思う
- ・こどもが3才位までが、特に子育ての負担が大きいなど、課題である
- ・祖父母など、こどもを看てくれる人が居ると居ないでは、全く違う
- ・あまりに小さいこどもには、積極的に関わることに気が引ける、声をかけづらい
- ・「母子健康包括支援センター」が、「こども家庭センター」に入ることは良かった

## &lt;質問&gt;

- ・市の助産師、受診している病院（助産師）とのつながりはあるのか
- ・3才までの市の支援が中心の説明だったため、3才以降の支援内容も知りたいと感じた
- ・「地域でこどもを育む」ことについて、地域にどのようにして「想い」を浸透させていくか、対応策を聴かせてもらいたい
- ・資料 18 頁（スケジュール）で、「こども計画」に市民や関係団体が具体的な意見を伝える機会はあるか、この会なのか
- ・外部有識者会議があると知ったため、どのような人で、どういう内容が話されているか知りたい。公開により会議を開催してもらいたい

## &lt;環境&gt;

- ・P7（心と体と環境が満たされてのウェルビーイング）～8P（こどもの思いや願いへの応答がウェルビーイングを育む）が重要と感じる
- ・母親が、自分の周囲の「環境」に対し、これで良いのかと疑問に持つことが大事
- ・ウェルビーイングには「環境」が重要となる

## &lt;その他&gt;

- ・市が様々に配付しているものが、本当に保護者が求めているものなのか検証が必要と感じる。保護者が求めているものが市内で調達できれば、市内の経済循環にもつながる
- ・支援が必要なこどもが中学校、高校を出てからの選択肢が少ない
- ・「ひとつ、ふたつ、みっつ」など年齢に「つ」がつく間（9才まで）が重要と言われている
- ・人類は、集団で子育てする時代が長かったが、近代になり、少人数で子育てするようになった
- ・サッカーの指導者とスポーツで関わっている人が多く、その関わりのなかで保護者とのつながりができることもある
- ・赤ちゃん教室で交流の場を提供している。きっかけづくりや、教室以外の場所でも会う関係づくりにつながることもある。妊婦教室もそういった意味があると思う
- ・独身で高山に赴任したが、オール高山でと聞き、自分にもできることがあるのではと参加した

- ・市が実施するものは、強制力が伴うような方法とし、多くの人が集まれるようにしてほしい
- ・こどもまんなか社会の実現には企業の理解が必要であるため、市から説明してほしい
- ・行政では足りない部分は、民間と連携することで、妊娠中や子育て中の保護者に良い環境を整えてあげられるのではないかと
- ・小児科が少ない。ネットで予約したいが、予約できない

## 2. 「はじめの100か月（妊娠前から乳幼児期）」について

### <健診、保健事業など>

- ・小児科医の都合により、こどもが活発でない、眠い時間（12:30開始）に健診があるなど、「こどもまんなか」になっていない事業があると感じる。健診の結果や意味にも関わらないのでは
- ・「産後ケア」の利用対象とならないと言われた。必要な人にサービスが行き届いていないと感じる
- ・出産前から乳幼児期に関しては、昔に比べるとサービス水準が上がってきていると感じる
- ・今は、こどもや母のことをとても考えられており、支援が手厚いと感じる。新米のママは心強い
- ・悩んでいる人も多いが、昔に比べると妊婦に対する支援は充実している
- ・測定→遊び→保健師による観察→カンファレンスや療育につなげる流れができると良い
- ・健診で「要観察」とされても、保健師からの話がなくて、保育園でも、どっち付かずでスルーされているこどもが多いと感じる
- ・子育て支援センターでは、生まれてすぐのこどもから助産師や歯科衛生士を招いた学習会に参加できたり、相談できるなど、こども家庭のサポートに力を入れている
- ・かかりつけ医が居るため、午後の健診はなしにしてはどうか
- ・運動の重要性が分かりづらかった。妊婦が運動するメリットが知られていない
- ・こどもの発達には妊娠期からつながっているため、健全な妊娠期を過ごすことが大切
- ・健診は、離乳食、ブックスタートなど時間が詰まっているため、民間から加わることが難しい。地域とのつながりが形になるように、官民連携を増やしてほしい
- ・こどもの体づくり、0才児の大切さ、遊びの大切さなどが家庭にしっかりと届くように、母子保健の取り組みをもっと充実させてもらいたい

### <地域>

- ・子育て家庭が孤立しないよう、地域で関わりを持つことが重要である。
- ・自分が満たされていないと人を満たすことはできないため、子育て中の父母の心が満たされるような環境を作ることが大切。そのためには地域のなかで孤立しない、相互に関わりを持つことが重要である
- ・地域の人が、こどもとどう関わって良いのか、分かっていないのでは→何気ない声掛け、一言の挨拶だけでも十分
- ・コロナ禍が明け、保育園の行事を地域に発信していくことに難しさを感じていたが、支所を巻き込むことで、糸口が開いたことがあった。自分たちだけで抱え込まず、地域の関与を得る工夫をしていく必要がある
- ・相談できる人は良いが、相談できず一人で悩んでいる人に救いの手があるような地域になると良い
- ・「まちぐるみ」をどう捉えるか、市全体と言うよりも、身近な地域での取り組みが必要である
- ・「まちぐるみでこどもを育む」という言葉には違和感がある。地域の高齢者が居ない。町内会が崩壊しかけていて、近所の人々が地域のこどもを看るといことが難しくなっている。「まちぐるみ」という言葉をしっかりと考える必要がある
- ・町内会や近所付き合いが希薄になりつつあるなか、みんなでこども家庭を見守り、自分からも声をかけるといった小さな行動の積み重ねが大事である

- ・小さな集落に住んでいて地域のことが見えている方だが、仕事をしていると、実は見えていない部分も多い。地域の交流があることが、ありがたいと感じる
- ・地域と子育て家庭の接点が少なくなってきた。みんなで看ようとしても、時間帯が合わない
- ・私のこどもは、まちの駄菓子屋で学校の友達とのトラブルや進路などを相談したり、その家族の影響で手話を学んだりしており、「斜め」の関係はありがたいと思う。日常の中で、たまたま出会ったこどもで良いので、対等な一個人として尊重し、関わってもらえれば嬉しい

#### <父親>

- ・資料が全体的に母親目線になっているため、父親目線も盛り込まれると良い
- ・飛騨地域では、父親の育児参加の割合が少ないそうである。市から企業に対する育休の普及促進や、父親に対するアプローチがもっとあると良いと感じる。強制は難しいかもしれないが、父親の参加を原則求めるような行事「一緒にパパになりましょう」といった機会があると良いのでは
- ・子育てに苦勞する母親を父親が助けるといった家庭が多いが、「父親が子育てを助ける（参加する）」という考え方ではなく、「家族一緒にこどもを育てる」という考え方が重要。子育てを楽しんでウェルビーイングな状態の父親、母親の姿をどんどん発信してけると良い
- ・家事や育児の負担の不公平感が無くなると良い
- ・夫婦の関係が不安定になると少子化にもつながるため、夫婦の相互理解が育まれると良い
- ・父親としての葛藤や頑張りを認めることも重要であり、誰も犠牲にならないようにすべき
- ・父親が集まれる場所づくりが必要
- ・父親の育児参加がどういった状況か、調査すると良い
- ・父親が参加するパパ教室の開催が増えると良い

#### <情報>

- ・市の支援策は細やかだが、心臓手術を受けた際に交通費が出ることを知らなかった。ニーズにより様々な情報が得られる仕組みがあると良い
- ・母子手帳の交付を受けた際、沢山の資料をもらったが、全ては見ることができなかった。ママ達からももっと早く知りたかったとの声がある。情報提供や広報の仕方に工夫があると良い
- ・市では細やかなサービスが整えられているが、情報がしっかりと届いていないことが多いと感じる

#### <今の時代>

- ・大綱などで良いことが書かれてあるが、昭和の時代の考え方が残っていて、本当に「令和版」なのかと感じる。コミュニケーションや居場所については、常時ネットで繋がっているなど、大人世代の感覚とは大きく変わっている
- ・ゲームの世界がこどもの居場所になっていて、ゲームでトラブルになりひきこもりになるなど、こども達を取り巻く環境が大きく変わっている
- ・社会の仕組みが変化しているなか、今の時代にあった支援の方法が検討できると良い

#### <教育>

- ・受験に際して、障がい者に選択肢がない。自閉症の子でも名古屋では3校も受けられるので、高山は遅れていると思う
- ・税金の分配方法どうか。北欧は教育費無償化ができています。東京都は高校の授業料を無償化した。教育水準が高い都市に行き易くなるため、一極集中が進む。行政サービスに格差をなくそうとすればできる。こどもの立つスタートラインが変わってしまう
- ・不登校は学校教育の根本を変えなければならない。教育委員会もこのWSに参加してもらいたい

<支援が必要なこども家庭>

- ・ヤングケアラーが市内にも少なからず居ることを知って驚いた。力を入れてもらいたい
- ・市は子ども食堂の支援をしているが、半分位持ち出しがあるので、存続が大変である
- ・自分のこどもは落ち着きがなく、走り回ったりするが、そういったこどもを見かけても温かく接してもらいたい
- ・親が精神的に幼く、家庭生活のトラブルになっても、乗り越え方が分からないケースが多い。離婚話になった時に、祖父母の意思に従ってしまう

<こどもの居場所>

- ・こどもやシングルマザーの居場所を作る必要がある
- ・自分は様々な人に相談しているが、相談できない人でも困らないように「こどもの居場所」づくりをすすめて、子育て世代のつながりを作りたい
- ・関わる大人すべてが、こどもの成長に影響すると思う。不登校のこどもに関わっているが、社会から自分の選択を否定的に見られていると本人が捉えてしまい、自己肯定感を下げることにつながっている
- ・近所や周囲の人とのつながりの中で、こどもが育っていったら良いが、難しい地域や家庭もあるため、つながりを作れるような「居場所」「〇〇の会」「フリースペース」のような場も必要と思う

<条例、進め方>

- ・条例（宣言）の策定について、こどもが参加できる、こどもと一緒に作れると良い。具体的には、学校の総合的な学習の時間を使って、こどもの権利条約やこども大綱などを学び、市の条例づくりにこどもが主体的に関わるような進め方をしてはどうか
- ・他都市の条例の研究をしてはどうか。豊田市の条例は専門家からも評価が高く、多治見市の条例はこどもの権利が何か示されていないのではと感じる
- ・全国の第一人者の大学教授や弁護士をつなぐことができる（愛知のM先生など）ため、専門家の関与を受け、学びながらこども条例を作れると良い
- ・条例と宣言では大きく異なるため、市として力を入れて取組む限りは、しっかりと条例を定めてもらいたい。法的な拘束力をもたせてもらいたい
- ・議会も条例を作れば良い
- ・意見を言いたくても言えない人があるなかで、現場に来て直接話を聞く「当事者ヒアリング」は非常に良いことと感じる
- ・ワークショップの今後のスケジュール感、条例とどのように繋がっていくのか、イメージできるように説明してほしい

以上